

京都

——三条通の個性と魅力を再構築

江戸、明治、大正と、時代時代の「京の顔」を担ってきた三条通。ところが近年、街は以前のにぎわいを少しずつ失いつつあった。もう一度この通りに人を呼び戻すには——地域住民をはじめ、通りにかかわる人々が行ったのは、創意工夫に満ちた新しい街作りのアプローチだった。古きを慈しみ、柔軟に新しさを取り入れる。京ならではの感性がここにある。

取材・文 木内昇 写真 野瀬勝一



「三条小橋をうちわたりて、かの旅籠屋のかたに着きたるに、宿引き『さあさあ泊まりさまじやわいな』宿屋の亭主『これはおはようお着きでござりますわいな』弥次『アイ、御世話になりやす』慣れぬ上方に右往左往の弥次喜多、這々の体で三条に辿り着いた場面。『存じ』『東海道中膝栗毛』の一節である。江戸の頃、東海道西の起点である三条はまさに京のシンボリックな存在であった。参勤交代の大名も、勤王の志士たちもここを通って京に入ったのだ。豊臣秀吉によって大改修がなされた三条大橋、そこから延びた三条通には旅館や商家が密集し、人の往来がにぎやかだった。

明治、大正と時代が進み、経済

が飛躍的な発展を遂げると、三条は金融の街へと姿を変えていく。日本銀行をはじめ日本生命などの企業が進出、当時最先端の技術を駆使した近代建築のビルを建て、ビジネスマンが闊歩する活気ある街となった。江戸時代から残る町家と西洋建築の建物が共存する景観は、人々の注目を集めるに十分な存在感があった。

「ところが、ここには『昭和』『平成』のいい建物がないんです」と語るのは、「うちもようやく創業一〇〇年を迎えました」と微笑む和装小物店「あど寿屋」の店主・居戸節二氏。「明治四十五年に市電が四条に通った頃から、徐々に人の流れが四条に移っていったようですね」



明治時代に日本銀行京都支店として建てられたレンガ造りの洋館は、現在「京都文化博物館」に生まれ変わっている。三条通に面したこちらが別館、その奥に数々の展示がなされる本館がある（上）。文化博物館総務課長の藤井貢氏（左上）。別館内部は創建当時のままに復元された。現在はコンサートなども開かれ、憩いの場としても機能している。その一部である2階に続く階段。随所に美しい意匠が宿る（左中）。かつての金庫室を改装した喫茶室「阿蘭陀館」（左下）。分銅でゆっくり動く窓口も当時のままに再現された（右下）。



短冊や和紙を使った文具類は伝統を守りつつも新鮮（左上・中央上）「長谷川松壽堂」の長谷川忠夫社長。「京都のれん会」の活動もされている（右上）底に暖簾。入り口の風情は町家のまま（左下）。昭和40年までは三条通にも祇園祭「あとのまつり」の山車が通っていた。町家時代の「長谷川松壽堂」の看板も（右下）

写真提供：居戸節二氏

刺子や編裂など、日本に伝わる伝統的な布を使った和装小物は、デザイン的にも使い勝手の面でも秀逸（右上）。長い年月をかけ大切に残された町家。歩道の部分に敷かれている石畳は、こうした建物とも絶妙の調和を見せている（右下）。居戸節二さん。三条改革の中心的存在だ（下）



そのため、金融街としての役割は残ったものの、それまで「京都の顔」として常に注目の的であり続けた三条の印象は薄らいでいくことになった。

友禅染の和紙など独創的な和紙工芸品を扱う「長谷川松壽堂」の社長・長谷川忠夫氏は、生まれも育ちも三条だ。

「静かな町でしたよ。電電公社や郵便局や銀行に勤めておられる人が通るくらいで、買い物客はほとんどなかったですなあ」

昭和の三条通を、そう振り返る。お陰でこの辺りは、「長谷川少年」として格好の遊び場だった。

「道は走り放題、キャッチボールもし放題。日銀さんの壁にもよく当てさせてもらいました。たまに失敗してボールが建物の地下に入っても、子供ですからフリーパスですわ（笑）」

なんとものどかな光景ではないか。世情も経済も風景も著しい変貌を遂げた昭和期、三条はその流



かつては祇園祭の「くじ改め」もここで行われていた。
写真提供：長谷川忠夫氏

動から取り残された形になった。ただ、だからこそその冥加もあって、それは江戸期、明治期の貴重な建物が取り壊されずに残ったこと。そして一〇年ほど前から、この希有な街並みを最大限に活かし、再び通りににぎわいを取り戻そうという活動が進んでいるというのだ。

歴史的建造物の残る街並みに立ち寄り易さを演出

きっかけとなったのは、平成四年、京都府建築士会が建都二二〇〇年の記念事業として三条通を研究材料に取り上げたこと。地域住民を含めて街に関して意見交換する機会ができ、その延長として「京の三条まちづくり協議会」が発足した。事務局長として活躍したのは、前出の居戸氏だ。「いやあ、私の場合は引つ張り込まれたゆづのが本当のところ」と苦笑いをしつつも、この町への愛着は一通りではない。

「うちの店は両親がそれぞれ育った家のちょうど真ん中の位置なんです。なにかこの場所に不思議な縁を感じておるんです」

終戦後三条に店を移し、以降今日までここで商いをしているだけ

堂々とした石造りの日本生命ビル（右）。「ichi-man-ben」代表の佐藤友也氏と、店長の村松千春さん。個性溢れる着こなし（左上）。袴や単衣など着物の種類の解説も。



あつて、街のことは知り尽くしている。その熟識を活用し、「三条通りお神輿まつり」といったイベントを行い、また店舗同士の連絡を取るなど、細やかな活動を行った。その成果だろう、しばらくすると三条に注目が集まりだした。新たなタイプの店が次々に出店され、若い層が集まり、買い物客も増え、街はにわかに活気ついた。京都大学の学生団体が主宰しているリサイクル着物の店「3・3・man・ben」もそのひとつ。着物を通して日本文化の理解を呼びか



当時のたたずまいを残したままの町家は歴史の重みがある（上・中）。戦後ここへお嫁にきた、という邑林房江さん。笑顔の印象的な方だ（右下）。足を見ただけでピッタリ合う足袋を見立てる邑林征士郎さんの手さばきは、神業（左上）。指先はほつれないようかがる。全6工程の丁寧な手仕事。

けようというコンセプトから生まれたこの店は、大正三年に建てられた日本生命ビルに店舗を構え、伝統を汲みつつ斬新な着こなしを提案している。代表の佐藤友也さんは、昨今の着物ブームに加え、三条通に人が集まりだした時期にオープンが重なったのは幸運だった、という。

「周辺には独創的な店の多い通りなので、自分たちも創意工夫をしなければ、と触発されますね」

こうした街の変化を、通りの名勝ともなっている「京都文化博物館」も静観してはいない。

「近年、旧電電公社を改装した新風館や、旧毎日新聞ビルに入った『アートコンプレックス1889』など、古い建築物を利用した商業

施設が次々にできました。若者層でにぎわうようになった要因は、そういう変化もあるのでしょうか」

と、総務課長・藤井貢氏。対して文化博物館は、旧日銀京都支店の建物（重要文化財）を活用した別館が三条通に面しているものの、重厚な建物ゆえの入りづらさをなかなか払拭できずにいた。そこで、昨年度、別館のリニューアル工事をを行い、今年五月からは三条通に面した入口を開放し、別館部分を入場無料にするという思い切った改革に至った。

「まず入っていただくことが大事だろう」と。その上で本館の展示にも興味を持っていただいてチケットを買ってもらえれば、と考えたんです」

今年三月に開催された「人体の不思議展」は歴代人館者数一位の記録を樹立。これに続けと、今後魅力的な企画展が目白押しだ。別館ではコンサートが開かれ、映画上映もする。柔軟な発想で、「気軽に楽しめる町の博物館」を具現化している。

**町家をどう維持していくか
景観の保全も大きな問題**

ガタガタガタとシンガーミシンの懐かしい音が聞こえてくるのは、景観重要建造物となっている築一四〇年の町家である。元治元年（一八六四）の創業の足袋専門店「分銅屋」の堂々とした看板が美しい。一工程ずつ丁寧な手作業で作られる足袋は、足に吸い付くよう

な履き心地であり、その技の確かさで、狂言などの芸能関連から寺社まで絶大な信頼を得ている。この老舗を守る邑林房江さんは、長くこの町家の住人でもある。

「私がお嫁にきたときは、ここから室町のほうは問屋筋で、みんな町家だった。それがどんどんマンションに変わっていくでしょ。寂しいゆづり気持ちもありますよ」

歴史的建造物の多い三条は、革新の一方でそれとは相反する景観保全という命題も抱えているのだ。気軽さ、立ち寄り易さという雰囲気演出に加え、歴史的な建築物をどう守るかということも同時に考えていかねばならない。

文化博物館がリニューアルの際もつともこだわったのも、その点。くつろぎスペースとして新たに設けられたウッドデッキは、建物の壁に合わせグレーにした。「まちづくり協議会」の居戸氏も、道路工事の際、歩道部分に自然石を敷くなど景観美化に努めた。

「昔ならではのものが残ってるんも、三条通の重みのひとつやから」という邑林さんの言葉は重く響く。分銅屋の内観を見れば、梁も柱もずしり太く、釘一本使わないのに微塵の歪みもなく組み合



長谷川松壽堂。景観保全のため通りより少し奥まったところに建てられているのがわかる。住居部分は採光も風通しも抜群。写真提供：長谷川忠夫氏

わさつている。後世に残すべき精巧な技がここにある。

それでも町家を残すのは容易いことではない。固定資産税も深刻な問題、加えて、住まい方や営業形態の変化により、従来のままでは不便が生じることもある。

町家の風情を損なうことなく、現代の生活に即した居住空間を体現するという方法はあるのだろうか——その難題にひとつの答えを出したのが前出の「長谷川松壽堂」。鉄筋コンクリートの六階建てに改築した際、外観は町家の雰囲気をもそのまま残し、景観を損なわぬよう工夫したのだ。

「虫籠窓や瓦葺きの庇など、町家ならではの外観を造り、四、六階の住居部分は以前の間取りに近い形で再現しています。ちょうどビルの上に町家がある、というイメージでしょうか。とはいえ新しいビルなので、建物自体を通りか

ら少し奥に建て、景観を乱さないよう配慮しました。職住一体なので以前は社員も気兼ねするところがあったようなのですが、今はそれも解消され、効率よく使えるようになりました」

この建物は京都市都市計画局による「きょうと景観賞」を受賞。民間の建造物では唯一の受賞だった。三条通の復興で興味深いのは随所随所に、個々人の意識の高さが垣間見えること。行政とも渡り合っが、けっして任せきりにはせず、斬新なアイデアで魁を作り出していることだ。しかし民間だけでは難しい面も多々ある。さらなる合理的な保全を目指し、民と官がどう結びついていくか——今後ひとつの焦点となりそうだ。

地域内でのつながりを深める 今後の三条に不可欠な命題

結びつきという点では、地域内でのコンセンサスにもまだ課題はあるという声は多かった。「様々な立場の人がいるので難しい部分もあるでしょう」とは、「まちづくり協議会」の会議に場所を提供している文化博物館の藤井氏。住まう人もあれば、商売を営む人もある。若者でにぎわう飲食の店

が乱立する一方で、暖簾を守り続ける老舗がある。この多彩さが三条通の魅力でもあるのだが、街作りの方向性に多少の誤差が生じているのもまた事実だという。また、昨今では店の入れ替わりも激しく、町人たちの結びつきは昔に比べると希薄になった。「昔は、柳馬場から高倉までが一町で、その中ではつながりが深かった。年寄りが威張つとつてなあ（笑）」と邑林さん。「今は残念ながら、新しい人を把握しきれんのですわ」と居戸氏も言う。立場の違う人たちがどうつながり、どう意識の同調を計るか。革新、環境保全と一筋縄ではいかない道のりを経てにぎわいを創出した三条は今、かつてあった人と人との関係性を取り戻す段階にあるのかもしれない。

「京都の人々は概して新しいもの好きなんです。ただ、勢いで造るんやなくて、一〇〇年経ったときに重要文化財になるようなものを作って欲しい。そういうことなんです」（居戸氏）。

それぞれが自分本位の目線ではなく、広い範囲で、長いスパンで街に接する。そして、今までの歴史を殺すことなく、過去とつながる未来を模索しつつ、この街なら

ではの新しい文化を創出しようとしている。本来当たり前のはずだった、けれど多くは目先の利害に翻弄されてしまい見落としていた街作りの原点が、ここにはあるのだ。

「ここには看板となる建築物がある。その時代時代の文化の香りがある。そうした文化的な香りをこれからも絶やしたくはないですね」

三条のみなさんは異口同音に、こう展望を語った。

この秋からは文化博物館が中心となり「アートフリーマーケット」が行われる。景観の整備はこれからも続けられるだろう。けっして平坦とは言えない街作りの過程。けれど、それほどに自らの住まう場所へ矜持と愛情を抱けるといことは、この上なく贅沢で幸せなことではなからうか。



土日のみならず、平日も若者たちでにぎわう通り。文化博物館前のデッキにはバルコニーが立てられ憩いの場所になっている。